

國學院大學學術情報リポジトリ

昨年度の活動報告

オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所主催国際シンポジウムShinto Studies and Nationalismに参加して

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 潤 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001762 |

オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所主催 国際シンポジウム Shinto Studies and Nationalism に参加して

遠藤 潤

2007年9月12日から14日の3日間、オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所 (Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences) 主催の国際シンポジウム Shinto Studies and Nationalism がウィーンの研究機関で開催され、本研究所からは平藤喜久子、遠藤潤の二人が参加して研究報告を行った。

今回のシンポジウムは、アジア文化・思想史研究所教授のベルンハルト・シャイド (Bernhard Scheid) 氏の立案によるものである。シャイド氏は、吉田神道についての研究を進めるとともに、ドイツ語圏をはじめとして、近代ヨーロッパにおける神道研究についても強い関心をもっている。シャイド氏とは、個人的には2001年2月にチュービンゲン大学日本文化研究所のシンポジウムで初めてお会いした。その後、國學院大學21世紀COEプログラム「神道・日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の神道・日本文化国際シンポジウムでは2度にわたって研究報告をしていただくなど、われわれの研究所とも関係が深い研究者である。

趣旨説明によれば、今回のシンポジウムは、欧米の戦前の神道研究においてドイツ語圏の研究者による研究は、重要な位置を占めていたのに対して、戦後は研究が停滞したこと、またドイツに限らず、戦後は日本の国家主義の影響によって神道の否定的イメージが強まり、研究領域としてもタブー視されるなどしたという状況認識に立ったうえで、これから

のあるべき神道研究のあり方を模索するものである。欧米および日本からの発題者が発表し、それぞれに対してディスカッサントがコメントおよび論点を提示するという形式で進められた。参加者および発表タイトルは下記のとおりである。使用言語は英語・日本語。

■9月12日(水)

Welcome: Helmut Krasser (オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所所長)

Opening address: Bernhard Scheid

林淳 (愛知学院大学)

Japanese Orientalism in Shinto Studies, Religious Studies, and Oriental Studies (神道研究・宗教研究・オリエン特研究における日本のオリエンタリズム)

Discussant: Sepp Linhart (オーストリア、ウィーン大学)

■9月13日(木)

遠藤潤 (國學院大學)

Shinto Studies and Shrine Policy in the First Half of the 20th Century: The Case of Miyaji Naokazu (20世紀前半の神道研究と神社行政—宮地直一を焦点として)

Discussant: Mark Teeuwen (ノルウェー、オスロ大学)

Will Hansen (アメリカ、サンディエゴ州立大学)

From Nationalism to Spiritualism: Rehabilitating the Study of Hirata Atsutane (ナショナリズムからスピリチュアリズムへ—平田篤胤研究の復権)

Discussant: Mark Teeuwen

平藤喜久子(國學院大學)

The Study of Japanese Mythology in the Early Showa Period (昭和前期の日本神話研究)

Discussant: Bernhard Seidl (オーストリア、ウィーン大学)

磯前順一(国際日本文化研究センター)

The “Religious/Secular” Dichotomy in Modern Japan: On Arguments of State Shinto (近代日本における「宗教／世俗」—国家神道論をめぐる)

Discussant: Mark Teeuwen

Jean-Pierre Berthon (フランス、国立社会科学高等研究院)

The Missionary, the Jurist and the Ethnographer: French Japanology on Shintô at the Beginning of the 20th Century (宣教師、法律家、人類学者—20世紀初頭におけるフランスの日本学における神道研究)

Discussant: Wolfram Manzenreiter (ウィーン大学)

■9月14日(金)

Klaus Antoni (ドイツ、テュービンゲン大学)

Kojiki Studies and Shintô Nationalism (古事記研究と神道ナショナリズム)

Discussant: Isabelle Prochaska (ウィーン大学)

Kate Wildman Nakai (上智大学)

Coming to Terms with “Reverence at

Shrines” : Sophia University, the Catholic Church, and the 1932 Yasukuni Shrine Incident (「神社参拝」の受諾—上智大学、カトリック教会、1932年靖国神社事件)

Discussant: Susanne Koppensteiner (ウィーン大学)

Michael Wachutka (テュービンゲン大学)

“A Living Past as the Nation’s Personality”: Hermann Bohner’s Comparison of Kitabatake Chikafusa’s Jinnô-shôtoki with Arthur Moeller van den Bruck’s Das Dritte Reich (「国家の人格」としての生命のある過去—ヘルマン・ボナーによる北島親房『神皇正統記』とアルトウール・メラウ＝ファン＝デン＝ブルック『第三帝国』の比較)

Discussant: Isabelle Prochaska

Bernhard Scheid (オーストリア科学アカデミー)

In Search of Lost Essence: Ideological Topoi in German Shinto Studies around World War II (第二次世界大戦前後のドイツの神道研究におけるイデオロギー的トポス)

Discussant: Bernhard Seidl

Concluding Discussion

一瞥していただければおわかりのように、各研究者のテーマは多岐にわたっており、Concluding Discussion ではまとまった結論へ向かうというかたちではなく、各発表に含まれている、より広い共通の問題への展開の可能性について相互に理解を深めることが行われた。近代の神道研究について、日本での状況と欧米での状況の双方にわたる研究発表が行われたわけだが、それは結果的にはあわせ鏡のように同時代における互いの思想や社会の状況を照らしだすものとなった。今後、この時期の神道研究についての考察を深めて

いくためには、議論が行われた場所をある程度類型化したり、あるいは論説の対象を明確にするなど、さまざまな整理の作業が必要になると考えられるが、今回のシンポジウムはその多様性において、あるいは内容の具体性において、そのための重要な基点になりうる。参加者にはチェコからの研究者もおり、聞け

ば東欧における学術研究の拠点としてウィーンは中心的な位置にあるという。歴史的にも文化的にも、この地は地理的に興味ぶかい位置にあるのであり、神道・日本文化をめぐる国際交流の今後にも期待ができるシンポジウムであった。このシンポジウムの成果はいずれ書籍として刊行される予定である。